



培養土の製造・販売に特化した株式会社AICHIメーデル。つくるのが難しいとされる水稲用の培養土。その製造に絶対の自信を持っている。芽が出ない製品をつくるわけにはいかない。研究熱心で、経験や実践を重んじる牧秀翁社長に今回はお話をうかがっている。
(吉良支店お取引先)



代表取締役 牧 秀翁 氏

“土”を売るビジネス 培養土の製造・販売

株式会社^{アイチ}AICHIメーデルは、培養土を製造・販売する企業である。

培養土〔培土〕とは、植物を栽培するために、堆肥や腐葉土、肥料などを一定の割合で混ぜ合わせた土のことだ。ホームセンターなどの園芸用品コーナーへ行くと、ビニール袋に入れられたものが販売されている。あれが培養土である。

培養土は肥料とは根本的にちがう。あくまでも“土”である。水耕栽培を除いて、植物を栽培するためには土が欠かせないが、その土の良し悪しによって、あるいは、その土が適しているかどうかによって、植

物の生長は大きく左右される。培養土はそれを使うと、植物がよく育つ土である。

AICHIメーデルの培養土はJAへ販売されるものが多く、主として営農業者（専業農家）に利用されている。

「40～50年前ならば、おそらく成立していなかった商売だと思います。いまは農家の需要があるから成り立っている仕事です」と牧秀翁^{ひてお}社長は話す。AICHIメーデルのビジネスを端的に表わせれば、“土”を売る商売。むかしは、わざわざ土を購入する農家^{こんにち}などいなかった。しかし、今日では大半の農家が土（培養土）を購入しているという。かつて、水やお茶を買って飲むことなど考えられなかったが、いまはペットボトル入りの水やお茶を買って飲むのに抵抗を感じない時代になっている。背景の事情はちがうものの、水やお茶を売るビジネスが成立しているように、“土”の世界にも似たようなことが起きている。

事業としての農業は、いろいろな面で専門的な管理が要求される。作物の生長を管

理して、狙いどおりの収穫量や品質を実現することが望まれる。この作場では質の良い作物がたくさん採れたけれども、すぐ隣の作場では採れなかった、という不安定な収穫では困る。個人が趣味とする栽培ではないのだ。趣味ならば、採れたり、採れなかったりしたほうが、むしろ楽しいだろう。しかし、事業ならば、そうはいかない。おなじ作物をおなじように育てたら、おなじものができなければならない。また、そうでなければ、生産性も上がらない。

しかし、自然の状態の土壌は、含まれる成分が均質でないのがふつうだから、往々にして量や品質にばらつきが出てしまう。そうならないためには、基本となる土をおなじにする必要があって、AICHIメーデルのような培養土の製販会社が、そうした営農業者の需要に応じている。

ただし、培養土を使えば、毎年、かならず狙いどおりに作物ができるというわけではなく、たとえ、おなじ培養土を使っても、作場の諸条件によって量や品質にちがいが



水稲用培養土
「オペレーター専用土2号」



野菜用培養土「元気くん」



し、今日^{こんにち}につながる基盤が形成されていた。「すぐれた培養土を開発するために、営農の人から田圃^{たんぼ}や畑を借りて、自分で種から作物を育てることを10年以上つづけてきました」という社長。研究のために、多い時には年に数十回も種蒔^まきをして発芽を調べたこともあったと振り返っている。

現在、AICHIメーデルが販売する培養土は年間およそ1万トン。牧社長は「土が売れると実感できるようになったのは、ここ10年ぐらいのことです。こんな時代が来るとは、まったく予想していませんでした」と感慨をこめて打ち明けているが、培養土が売れるようになった背景には、三河地域の農家が大規模化したことがある。大規模な農業こそ、培養土の需要がある。以前は、この地域にも先祖代々の土地（農地）で農作物を栽培し、生計を立てていた小規模農家が散在していたが、自動車産業の拡大とともに数多くの部品メーカーなどが生まれると、農地を売却したり専業農家に預けたりして、自分は勤めに出るといった、いわ

ゆる農業離れが起きた。そうすると、農業を営もうとする人が利用できる農地が相対的にふえて、それが専業農家の大規模化につながった。

創業時から培養土に特化 水稲用はどこにも負けない

培養土にも、いろいろなタイプがある。AICHIメーデルが製造しているのは水稲用と野菜用（園芸用）。主力は水稲用で、全体の6割以上を占める。

水稲用の培養土というのは、イネの育苗床に敷く培養土である。イネは、育苗床で種から苗になるまで育てられ、そのあと水田に植え替えられる〔田植え〕。育苗床での生育状態（根の張りかた）が後の作業やイネの生長に影響を与えるので、育苗はコメ作りにおける重要な作業工程のひとつである。

AICHIメーデルの水稲用の培養土は、山から採った山土^{やまつち}（基本用土）に、ピートモ



イネの育苗床

スやパーミキュライト、パーライトといった補助用土をブレンドし、それをロータリーキルンと呼ばれる回転式の窯で焼成、そのあと殺菌・乾燥して作られる。

基本用土の山土にも、さまざまな土があって、なかでも最も良いとされるのが赤土である。最近はその土が手に入りにくくなってきて、仕入れに苦労しているという。山から土を採取する専門業者が少なくなっているからだ。

専門業者の減少は山土需要の減退が原因だ。大量に土を必要とする埋立工事に、地下鉄工事や道路工事で掘り起こされた土をリサイクル処理したものを使うようになっていたので、山から採った新しい土が不要になっている。そういったことが影響しているようである。培養土の基本用土には、リサイクル品は使っていない。

補助用土のピートモスは水苔が腐植化したもの。パーミキュライトは^{ひるいし}蛭石を高温で焼成したもの。パーライトは真珠岩を砕いて焼いたもの。これらはすべて輸入品である。国内では手に入らない。

培養土に補助用土を混ぜるようになったのは20年ほど前からだ。それまでは山土100パーセント。山から採った土は、かなりの重量があって、多量の培養土を利用する農家にとっては、大きな作業負担だった。そんななか、「もっと軽くできないか」という要望が強まり、ピートモスなどの軽い素材を混ぜることで土の軽量化が図られた。AICHIメーデルの軽量化培土は、他社



にさきがけて開発されたため、全国でも最長クラスの販売実績を誇っている。

AICHIメーデルは野菜用の培養土も製造しているが、野菜用は水稻用とは異なる作り方をする。野菜は有機質成分が非常に重要だ。木皮チップや^{もみがら}籾殻、海草、大豆屑、麦、デンプン。そういった素材に微生物菌を配合し、発酵させて有機物を作っている。発酵の期間はおおむね1年半だという。

ただ、野菜は種類が極めて多い。それゆえ、湿った土を好む野菜もあれば、乾燥した土でなければ育たない野菜もある。また、おなじ野菜でも、いろいろな作り方があるから、それぞれの作り方に最も適した培養土をつくる必要がある。

培養土を製造している業者は全国にかなりある。しかし、そのほとんどが培養土をサブ的な事業に位置づけていて、メイン事業にしているところは多くない。培養土に特化している業者となると、おそらく

は多いんです。そこで現実に対応するためには応用を利かさなきゃいけないんですが、結局、経験がものを言います」と社長は述懐する。

堆肥を混ぜたタイプの水稲用培養土は、これまでの培養土になかった作用・機能が確認されたことから、後に作物学会で発表され、製品化もされた。

芽が出る ~ メーカー

「AICHIメーカー」の社名は、平成15年に法人を設立するとき、社長自身が考えた名前だ。

「AICHI」は愛知県のアイチ。おもしろいのは「メーカー」のほうだ。芽が出て、すくすく育つ培養土こそ、プロがつくる培養土だろう。芽が出る、めがでる、めえでる、メーカー。それでメーカーとした。「社名の由来は、ちょっと気恥ずかしい」という社長、「いろんな意味を込めています。芽が出る、前に進む、元気になる。そういったイメージを持ってもらえるように命名しました」と説明する。

培養土の専門会社として、芽が出ない製品を絶対につくるわけにいかない。いくらコストが高くつこうが、手間がかかろうが、よい製品をつくることを基本中の基本に据える。そのための研究開発や実験を惜しむこともない。利用者からの信頼を失うことがあっては、明日はないのだ。「植物は人間のようには器用に動いてくれないので、粗



末な製品をつくれれば、かならず植物も粗末なものになる。逆に、きちんとした製品をつくれれば、植物もそれに応えてくれます。相手は生きもの。生きものは正直ですから騙せません」

農業の方向を見誤らないように

培養土ビジネスの将来は、農業の将来にかかっていると言って過言ではない。その農業について牧社長は「率直に言って、どうなっていくのか、不安です」と、危惧の念を抱く。

「日本の農業は基本的に管理された農家なんです。ほとんどが補助金を受け取っているはずで、全部を自己資金でやっている農家はおそらく少ないでしょう。その補助金も政策しだいで縮小する可能性を否定できません。農業が一気に崩壊することはないと思いますが、補助金に頼らず自立できる体力をもった農家が増えていけば、と思

